
寄り添う僕ら

千鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

寄り添う僕ら

【Zコード】

N3833A

【作者名】

千鶴

【あらすじ】

戦争に駆り出されていった兄、恵介の帰りを待ち続ける妹、香。しかし、彼女を待っていたのはあまりに残酷で、冷酷で　でも、それはただの現実で。

プロローグ（前書き）

初の連載です。至らぬ部分も少なからずありますが、どうぞ最後まで読んでみてください。ね。

プロローグ

なあ……お前は今、何している?

あれからもう一ヶ月か……早いもんだな。
ん? 一ヶ月か?

はは、こんな感じでこんなことしていると、田田の感覚が無くなっちゃう。

そつひの様子はどうだ? 元気でやつてるか?
俺がいなくても、ちやんと飯食つてるか?

洗濯してる?

風呂は?

寝る前にみちやんと歯を磨いてるか?

友達と喧嘩してない?

……またあの時みたいに一緒に顎下げに行くのはいいめんだからな。
つたく仮にも女の子なんだから、亜紗ちやんを見習つてお前も少し
は温和しく……まあいいや。

ああ、星が綺麗だ。

そういうえばずっと前に、お前の我が儘に付き合つて、星を見に行つ
たことがあつたつ。

その時お前はえらく興奮していたけど、俺は正直ちつとも綺麗だな
んて思わなかつた。ただ、暗闇に白い豆粒か何かをぶちまけたよつ
にしか見えなかつたんだ。

その時は、な。

でも、今はすごく綺麗だと思つ。何でかな?

今度、また星を見に行つ。お前に教えてもらつた星が、すごくよ

く見えるんだ。

約束？ 約束は出来ないな。

だって、俺が約束を守らない奴だつてことくらい、お前が一番よく
分かってるだろ？

ああもうこんな時間か。

悪い、明日は早いんだ。今日は疲れたし、もつ寝るよ。

また近いうちに手紙を書くよ。これは約束する。

じゃあな。おやすみ。

プロローグ（後書き）

PS あれ、星の名前何だっけ？

1・手紙

また近いうちに手紙を書くよ。これは約束する。
じゃあな。おやすみ。

恵介より

手紙を読み終えて、香は安心したような笑顔になつた。

今まで何の連絡も無く心配していたが、まだ、無事でいてくれた。
兄である恵介が戦場に行つてしまつてから、もう二ヶ月が経とうと
している。その二ヶ月間、香は六畳のアパートで一人暮らしを続けて
いた。

二人の両親は、香がまだ中学生の頃に他界した。一人に当時住んで
いたマンションの家賃など払える訳もなく、すぐにマンションを出
た。

ほぼ他人のような付き合いだつた親戚に世話になる訳にもいがず、
今のは小さなアパートで一人暮らしを始めた。

大学生だった恵介は大学を辞め、香を高校に行かせるために懸命に
働いていた。

「…お兄ちゃん、あたしも働くよ。迷惑ばっかりかけらんないもん。」

香が高校生になると、恵介の仕事は一層厳しくなつた。

朝は香が起きた時には既に仕事に出ていて、香が寝た後に帰つてくる。そんな無茶苦茶な生活を続ける恵介に、香は以前言つたことが
あつた。

しかし、恵介は香の頭を乱暴に撫で、

「心配すんな。お前はちゃんと学校行け。」

そう言って笑った。

香にとって恵介は、信頼出来る兄であり、唯一の肉親だった。絶対に失いたくない存在だった。

だから恵介がいつ帰つて来てもいよいよ、香は一人でもアパートで待つて居た。

手紙を丁寧に真ん中から折つて、机の引出しに入れる。机の上の時計を見ると、七時四十分を指していた。

早く着替えて朝食を食べて学校に行かないと。

パン一枚トースターに入れ、焼いている間に制服に着替える。着替え終わるとほぼ同時にパンが焼け、少し焦げたパンを口に押し込み、ミルクで流し込んだ。

慌ただしい一人の朝にももう慣れたもので、支度が済むまで二十分とかからなかつた。

「いっべきます。」

テレビの上の一室四人で写っている写真に声をかけ、静かに玄関のドアを閉める。

いってらっしゃい。

「亜紗つーおはよー！」

アパートの階段を駆け降りながら、下で待っていた友達に声をかけた。

「あ、おはよう…？」

「ん? 何?」

朝から変な視線を友達に向けられ、香は戸惑つた声を出した。

「香、聞きたいことがあるんだけど。」

その友達、亜紗は、香の顔を真っ直ぐに見て言った。

「まず、今日歯は？」

「磨いたよ？」

「顔は？」

「洗った。」

「じゃあその寝癖は？」

「ああ、気付いてたけど直す時間も無かつたし、これはこれでいいかなーって。」

そんなことか、という口調の香に亜紗は少し呆れた顔をする。

「だつて誰かに会いに行く訳でも、学校に彼氏が居る訳でもないし、別にいいんじゃない？」

まあ、確かに。亜紗は思わず吹き出した。

「…本当に女の子？」

「一応、ね。そ、行こ。遅れるよ。」

香や亜紗の通う学校は、香のアパートから徒歩二十分程のところにある。

とりわけどの部活が強いとか、進学率が高いとかではない、普通の公立高校だ。

「そういうえばわ。」

並んで歩きながら、香が口を開いた。

「昨日、兄貴から手紙來たよ。」

「本当！？」

恵介が戦争に行つたことは、亜紗も知っていた。兄弟のいない亜紗にとつても、恵介は面倒見がよく、頼りがいのある兄のような存在だった。

「で、お兄さん何て言つてたの？」

「ん、『亜紗ちゃんみたいに少しおじとやかになれよ』だつて。

余計なお世話だつづーの。」

「……他は？」

「いや後は別に……」飯ちゃんと食べてるか？とかそんな感じ。「ふふ…やっぱ心配なんだね。よかつたね、『兄貴』無事で。」

『兄貴』。

恵介を、香がそう呼ぶようになったのは、つい最近のことだ。恵介自身は、香が自分のことを『兄貴』と呼ぶのを聞いたことは無かつたけれど。

「うん。」「

そう言つ香の笑顔は、とても強い想いに満ちていた。

もう、甘えてばかりいられないから

「あひと、もひすぐ帰つてくるよ。」

1・手紙（後書き）

恵介と香の苗字は浅野。 亜紗は斎藤。 使わないけど。

2・兎貴

その頃は、戦争が始まることは知っていたけれど、実感は全くなかつた。

平和だつたから。

今思えば、その時から、残酷な現実は始まつていたんだ。

それは、ちょうど一ヶ月前のことだった。

いつものように、アパートの階段の下で香を待つていた亜紗は呟いた。

「遅いなあ……」

香が待ち合わせの時間に遅れるのはいつものことだが、今朝は遅すぎる。もう走らないと遅刻になつてしまつ。

亜紗は階段を上がり、奥から二番田の部屋のドアをノックする。が、返事が無い。

少し躊躇つたが、この時間なら恵介はもう仕事に出ていてない。鍵のかかっていないドアノブを回して中を覗いた。

部屋の中には、布団が一つ敷いてあり、小さな盛り上がりがもぞもぞと動いていた。

亜紗はその盛り上がりに向かつて言った。

「香ー? どうしたの、まだ寝てたの? 私遅れるから先に行くよ。」

すると中から、寝ぼけたような、か細い変な声が返ってきた。

「あ、うん…先に、行ってて…後で…私も…すぐに行くから…」

「あ、やっぱり。今起きたの? ジヤ、早く来なさいよ。」

そう言つて亜紗は静かにドアを閉め、一人で学校へと向かつて走つていつた。

香の涙に、気付かず。」

結局その日は、香は学校に来なかつた。心配になつた亜紗は、帰り道に香のアパートへ寄つた。

一階の奥から三番田の部屋には明かりがついていて、中に香が居ることを示していた。

しかし、ドアをノックしても返事が無い。

ドアノブを回す。鍵はかかつていなかつた。

部屋の中は、朝と全く同じ状態で、布団すら片付けていなかつた。香はまだ布団の中に居るらしく、盛り上がつた布団が静かに小さく上下している。

「香ー！あんたまさか朝からずっと寝てたの？」

驚いた亜紗が声をかけるが、返事は無い。

「ちょっとどうしたの？具合悪いの？ちょっと上がりよ。」「心配になつて部屋に上がり、枕元に来てしゃがんだ時、香が起き上がりつぼそつと口を開いた。

「…お兄ちゃんが…」

その日は虚で、いつも明るさなど、どこかへ吹き飛んでしまつたようだつた。

「お兄ちゃんが…戦争に行くんだつて…」

世界が、止まつた。

「…え？」

「…だから、お兄ちゃんが、戦争に行く。人を殺しに、戦争に行くの。」

香はなるべく感情を込めないように、一言ずつ切りながら、言った。
まるで、人形のような顔で。

「嘘…」

「嘘じゃないよ。」

「だって…戦争なんてまだ全然…」

「ここは、ね。」

あくまで冷静を装う香の手は、固く拳を握つて震えていた。

「なん、で…お兄…」

「知らないよ…！」

突然、亜紗の声に香の怒鳴り声が割り込んだ。

驚いて黙り込む亜紗に向かつて、香はもはや拳だけでなく全身を震わせながら、吐き出すように一気に怒鳴つた。

「本当に何でよ！何でお兄ちゃんが人を殺さなきゃいけないの！？何であんなに優しい人が、殺人者にならないといけないの！？何でよ！？」

涙で顔をぐしゃぐしゃにして、香はまだ怒鳴るのを止めない。

「もし…もしお兄ちゃんが死んじゃつたら、私、一人ぼっちになっちゃうよ…！もう寂しい思いをするのは嫌…！大切な人を失くすのなんて、もう沢山なのに…！…もう嫌…！」

亜紗は、何も言えなかつた。

亜紗には両親がいる。兄弟はいないが、近くに従兄弟がいて、実の姉妹のように仲がよかつた。

それらが、全て失われるのだ。

そんなことは、想像出来なかつた。
したくなかった。

でも香には、それが現実で。

しばらく一人とも、一言も喋らなかつた。

どのくらい経つたのだろうか。外がすっかり暗くなつた時、香がぽつりと呟いた。

「私…弱いよね…」

「…え?」

その声は震えていて、今にも消えてしまいそうだつた。

「弱いよね…泣いてばつかりで…何も出来ない…何もしない…」
いじけた子供のように膝を抱えて、前後にゆらゆら揺れながら、言う。

「お母さんとお父さんの葬式の時も、泣いてただけで何もしなかつた。その時何を考えたとか、一人に何て言つたかとかなんて全然覚えてなくて、気付いたら式は終わつてた。」

亞紗は何も言わない。

「…覚えてるのは、煙突から真つ黒な煙が上がつてたこと。それ見て、ああ、いなくなつちゃつたんだなつて思った。そしたらすぐく哀しくなつちゃつて。自分はなんて無力なんだろうつて。何でちやんとお別れしなかつたんだろうつて。すぐ悔しくて、涙が出た。」

淡淡と話し続ける香の目には、涙は無かつた。

「その時、強くなるつて決めた筈だつたのに。何で変われないんだろつ…強くなりたいのに…ならなきゃいけないのに…」

強くなるといふことは、こんなにも厳しいものなのだろうか。
小さな肩に押し付けられたそれは、大き過ぎはしないだろうか。

「…今度こそ、強くななくちゃ…お兄ちゃん…『兄貴』が安心できること…」

「香…」

「ねえ亞紗。」

香は、涙のあとがくつきりと残つていたが、決意の込もつた顔で亞

紗を見据えて聞いた。

「きつと兄貴、帰つてくるよね。」

「…うん。きつと。」

無理矢理笑顔を作つて、わざと大きな声で亜紗は答えた。
そして大きく息をついて、明るく聞いた。

「これからは、『兄貴』なんだ?」

「うん。もう『お兄ちゃん』なんて甘えた呼び方はやめる。
番も同じように、不器用な笑顔を見せる。」

「もう、甘えてばかりいられないから。」

生きていくには小さすぎるから。

押し付けられたものが大き過ぎるから。
強く、なるんだ。

2・児貴（後書き）

ちょっと無理矢理つぽくなつちゃいました。頑張ります。

3・『おかえり。』

それからすぐに、恵介は戦場に旅立つた。

出発の前日の夜、二人は布団の中で、少し話をした。

「ねえ『お兄ちゃん』。」

「ん？」

「…明日だね。」

「明日だなあ。」

いつもより、少し寄せて敷いた二つの布団の中で、一人は互いに背中を向けて横になっていた。

「本当に、行くの？」

「ああ。」

「戦いに行くの？」

「ああ。」

「人、殺しに？」

「…仕方ないんだ。行くしかないんだよ。」

しつかりとした、しかし何処か哀しげな声で、恵介は答えた。

「殺されるかも…しないのに？」

「…そうだよ。」

部屋の外は静かで、小さな声でも会話が出来る程だった。

一瞬の沈黙の後、香が短く聞いた。

「…何で？」

「…仕方ないじや済まされないことくらい分かつてるけどな。でも、

それを始めてしまった。始めてしまったものは終わらせなきゃいけない。」

そこで一息ついて、さらに続ける。

「俺だつて出来れば行きたくない。殺したくないし、殺されたくない。でももう、諦めるしかないんだよ。悔しいけど、受け入れない

といけないんだ。」

人間なんて弱いもんだな。そう言つて恵介は黙つた。
再びの静寂の中で、背中を向けたままの香が言つた。

「…もう寝よう。明日早いんでしょ？」

「そうだな。おやすみ。」

「…おやすみ。」

そう言つて一人は目を閉じた。

真つ暗な部屋が、少しだけ寒く感じた。

次の朝、目を覚ました恵介は、いつもはまだ寝ている香が朝食の支度をしているのを見てかなり驚いた。

時計を見ると、午前六時十分。普段の香なら、叩いても起きない時間である。

「珍しいね。」

目の前に並べられた、ハムエッグにトースト、トマトサラダというオーソドックな朝食を見て言つた。

「これからしばらく私一人だからね。」

熱いコーヒーを出しながら香が答える。

「どう?」

「ショッパイ。」

ハムエッグを一口食べて感想を述べる。

「む…」

「いや、美味いよ。85点。充分及第点だ。これなら一人でやっていけるね。」

それから恵介は、最後の朝食をゆっくり時間を掛けて食べた。
時々、涙が出そうになるのを堪えながら。

香は恵介が食べるのを、テーブルの向かいに座つて眺めていた。

「じゃ、行つてくる。」

「うん。」

「なんかお土産いる?」

「んー…どに行くか分かんないしなあ。」

「いらないの?何か虚しいな…」

「どうせ頼んだって忘れるじゃん。」

「いや、まあ…そつなんだけど…」

「あ、じゃあ一個だけ。絶対忘れないでよ。」

「うん。何?」

「…絶対に、生きて帰つて来て。」

「…よし分かつた。覚えとく。」

「約束だよ…?」

「…ああ。じゃ、行つてくれるよ。」

「…こつてらつしゃい。」

『ただいま。』

『おかげり。』

この会話が出来るのは、何時になるだろうか。
何時が出来るだろうか。

その日を期待して、
待つてます。

3・『おかげ』（後書き）

「」ではまだ『お兄ちゃん』。最後の夜ぐらご、甘えさせてあげてください。

4・不幸の手紙

十一月。外は雪がちらつを始める季節。

恵介が戦争に行つて、もう三ヶ月が経つた。

「……うそつき……」

香は毛布に包まって、何度も寝返りを打つた。
一つくしゃみをして、ふてくされた顔で呟く。

「……なーにが『これは約束する』だよー……一ヶ月も経つてんのにち
つとも来ないじゃんー……」

ストーブのアラームが鳴り、給油のランプが点灯する。香はのろの
ろと毛布から這い出して、玄関にある灯油タンクから灯油を補充し
た。

「うー…寒い…けーすけの、ばかやろー…！」

ぶつぶつ独り言を言いながら、毛布に戻る。

と、その時、郵便受けが開き、数枚のチラシが投げ込まれた。

香は先程とは打って変わった勢いで毛布から飛び出し、チラシを拾
い上げてチェックし始めた。

そして、一枚のそれに目が止まる。

「来た…」

それは紛れもなく恵介からの手紙だった。

急いで封を切り、中の手紙を広げると、慌てて書いたのか少し乱れ
た字が並んでいた。

えっと、まず…手紙書くの遅れてごめんな。

こつちは少し厳しい状態で、中々書いてる暇が無かつたんだ。

そつちはもう雪降ったか?こつちはまだまだ暖かくて、雪どこるか

雨も降つてない快晴だよ。

こんなにいい天気の下で俺達は何をやつてるんだって気分になる。
いい所だぜ、ここは。

そういうえば、もうすぐ年明けだな。全く実感無いなあ。

悪いけど、今年は一緒に年越しあ出来なそうだ。お前の作った年越し蕎麦も食つてみたかったんだけどな。

まあ俺はこつちで仲間と厳かに年を越すことにするよ。お前は誰か友達と賑やかにやつてくれ。

ああ、もう時間だ。短くて悪いな。

そつちはもう寒いだろうから、風邪ひくなよ。
じゃあな。

恵介より。

「年越し…か。」

もうそんな時期か、と眩きながら、初めての一人の年越しを想像する。

寒い静かな部屋で、茹で過ぎてくたくたになつた蕎麦をすする。誰に言つでもなく、一人での新年の挨拶。

「うわー…切ない。」

絶対にごめんだ。想像しただけで自分が可哀相になる。

「どーしょ…亜紗の家でも行こうかな…」

香は亜紗の家を想像してため息をついた。香のアパートが四つは入りそうな大きな家。

香は去年と一昨年のクリスマスも、亜紗の家で過ごしていた。

「…明日聞いてみよ…」

迷惑かな、とも思いながら呟き、香は布団に潜り込んで扉を閉じた。

…トントン…
…トントン…

誰かが玄関のドアをノックしている。香はゆっくりと立ち上がりて、玄関を開けに行つた。

「どなたですか？」

香はドア越しに声をかけるが、返事が無い。

「どなたですか？」

もつ一度聞くが、やはり返事は無い。

香は首を傾げながらドアを開け、外を覗いた。

「…悪戯かな？」

外に誰もいないのを見て呟くと、ドアをゆっくりと閉めようとした時。

「ん？」

ドアの間に挟まっているのに気がついた。真っ白な封筒に入つた手紙。

軍からの封筒だった。

「何…だ、ろ…」

嫌な予感が胸を過ぎる。

そつと封筒を拾い上げ、ゆっくり封を開けた。
中には一枚の小さな手紙が入っていた。

不幸の手紙より、もつと悪い知らせが。

「嘘…」

「そうだ。」

嘘に決まつてゐる。

兄が、戦死したなんて。

だって、昨日手紙が来たんだもの。

嘘だよ。だって。

：だってさあ！

「お兄ちゃん！」

嘘なんじょ？

だから、早く帰つて来てよ。

信じているから。

4・不幸の手紙（後書き）

前回から大分間が空いてしまいましたが、もうじきこのお話も終わりです。頑張ります。

Hプローグ1・アルコル 恵介

ああ、思い出したよ。星の名前や。

ミザールとアルコル、だつたよな。

北斗七星にそんな名前の星があつたなんて知らなかつた。中々博識だね。

ああ、やっぱり此処から見える星は綺麗だ。
とても、綺麗だ。

俺が死んだら、やっぱりお前は怒るかな？怒るよな、一緒に星を見に行くつて約束してたもんな。

泣く？いや、お前は泣かないよ。

お前は強い子だから。

父さんと母さんが死んだときも、お前、泣いてる俺の隣で歯を食い縛つて泣くの我慢してたもんな。

覚えてる？

だから、お前はきっと今度も泣かないよ。

ああ、あれ？

おかしいな…星の数が減っちゃった…

あ、そつか。俺の目がおかしくなつてんのか。

……星、見に行きたかったなあ。

楽しみにしてたんだよ？もう何年ぶりだらうなあつてや。

こつちで見つけた星座とか、いっぱい教えてやひひと思つてたんだ。面白に名前のも沢山見つけたんだぜ。

…俺が勝手に作ったのもあるナビ。

やっぱこな、どんどん星が減つてゐる。

香、今どこにいる?
何をしてる?

ごめんな、香。

ダメな兄貴で。

お前との約束、一回も守つたことないよな。
本当、ごめんな。

ああ、

星が、見えない。

暗いよ。

お前がミザール、俺がアルコル。

そつ、そつだつたよな。

北斗七星の中の、寄り添つ一つの星。

俺たちに似てる星。

見えない。

星が見たい。

星が見たいよ。

ああ、香。

俺にはもつ、星が見えないよ。

エピローグ1・アルコル 恵介（後書き）

真っ暗闇が、恐いんだ。

H&Rローグ2・ミザール 香

……嘘つき。

やつぱり今度も約束守ってくれなかつたね。まあ、期待してなかつたけど。

兄貴が戦争に行ってから、私、一生懸命頑張つたんだよ？兄貴がいつ帰つてきててもいいように。

朝は時間通りに起きれるようになつたし、掃除もしつかり出来るようになつたんだよ。

亜紗には負けるけど、料理も上手になつたんだ。

それなのに…

ねえ、『お兄ちゃん』。

昔、見に行つた星の名前、覚えてる？

お兄ちゃんあの時半分寝てたから覚えてないかな。

ミザールとアルコル。寄り添つ一つの星。

貴方がアルコル、私がミザール。

ねえ、お兄ちゃん。

そこからは、星が見える？

私が見える？

今日はちょっと天氣が悪くて、アパートからは星が見えないや。たつた一つ、淋しそうに満月が浮かんでるだけ。

私にそっくり。

独りぼっちで、淋しそう。

「ねえ、なんで？」

「なんで、帰つて来てくれなかつたの？一緒に星を見に行かつて約束したじやん。」

「独りぼっちにしないつて言つてたじやん。」

「それも嘘だつたの？」

「じめん、そんな訳ないよね。」

「私、思うんだ。」

「お兄ちゃんが戦争に行つてから、私、毎日神様に、お父さんとお母さんに祈つてた。」

「どうかお兄ちゃんが生きて帰つて来ますように。」

「でもね、

「神様なんていない。」

「だから、自分の力で生きるしかないんだよ。」

「私、独りぼっちになつちやつたけど、ちゃんと頑張つてんだよ？」

「だから……」

「ねえ、お兄ちゃん。」

「そこからには、星が見えてますか？」

エピローグ2・ミザール 香（後書き）

それでも、大切な人の為に祈ることは、愚かなことですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3833a/>

寄り添う僕ら

2010年12月30日14時07分発行